

福井大学 教育学部 教員養成スタンダード その理念

スタンダード (standard) という言葉は現在、基準や標準という意味で用いられることが多いですが、元々は軍隊の集結地点を示す旗を意味する言葉でした。スタンダードは本来、皆が目指すべき旗印となるもので、実践や活動の拠り所となるものです。

福井大学教育学部の教員養成スタンダードは、本学部で教員免許取得を目指す学生が、教師になるにあたって目指すべき目標と、その目標に向かって行われた学習の成果を評価するための基準を明確化したものです。このパンフレットに示された教員養成スタンダードには、新しい学校教育と教師、そして専門職としての教師の能力と学習の評価に関する大切な理念が埋め込まれています。

新しい学校教育のデザインと教師

大人が自ら学び自ら考える力を発揮し、異なる考えの人々と対話し、激しい変化の中で方向性をしっかり定めて進んでいく。あらゆる重要な事柄が、すべての人が参加できる開かれた対話の空間において、その事柄に関心を共有する人々によって判断され遂行される。21世紀はそんな時代になりつつあります。

21世紀の学校教育は教師だけが担っていくのではありません。また、学校だけが教育を担っていくのでもありません。教師、保護者、地域の市民、様々な専門職といった、まさに地域の教育に共通して関心を持つ人々が、関心の輪を創り出しながら連携し、地域が一体となって人づくりを支えていくのです。

ただし、このことは、21世紀における学校教育の役割が小さくなるということを意味しているわけではありません。学校教育は、すべての人に開かれた公教育を担う中心的な存在として、ますます重要になります。

このとき、学校教育を中心的に支える教師は、自ら学び自ら考える子どもを育てる探究的な授業やカリキュラムを日々創り出すと同時に、教育に関する様々なネットワークの結び目を創り出していく存在としても活躍することが重要となります。これからの時代の教師には、まず、探究・実践と省察を繰り返し、生涯にわたって学び続けること、また、重要な事柄に関する深い理解の源泉となる学識を形成すること、さらに、同僚、保護者、地域の市民、他の専門職と連携し協働することが、その力量として求められるのです。

福井大学教育学部の教員養成カリキュラムの特徴

このような力量を形成するために、福井大学教育学部における教員養成カリキュラムは、以下のような特徴を持って構成されています。

第一は、公教育の担い手としての教師を育てるという使命のもと、幅広い専門領域のスタッフが協働して学生の学習を支えていることです。教科内容領域を専門とするスタッフ、教科教育を専門とするスタッフ、教育学を専門とするスタッフが、それぞれの専門領域を超えて、近年の重要課題の解決過程への参加を目指す新しい授業やカリキュラムを開発しています。

第二は、学部の早い段階から、子どもたちの成長と発達を促す協働的な実践に参加することです。本学部の教員養成カリキュラムにおいては、「教育実践研究 A (教職入門, 学習支援実習, 長期教育実習)」, 「教育実践研究 B (学習過程研究, 組織学習研究: 探求ネットワーク)」, 「教育実践研究 C (学校教育相談研究: ライフパートナー)」, 「初等・中等授業研究」といった実践科目群がコア科目として1年次から位置づいています。協働的に実践し省察するコミュニティに参加す

ること、また養成段階に特有の実践経験を積むことによって、協働で実践する状況の中で省察し学び続けると同時に、より切実さをもって必要な学識を形成していくことになります。

第三は、先輩たちが自身の学びの履歴を残し、それを後輩たちに伝えていく世代継承サイクルを実現していることです。たとえば、教育実習前に大学において行われる先輩の模擬授業に後輩が児童・生徒役として参加する、また、1年生から異学年で様々なブロックを作って地域の子どもたちと一緒に長期間活動する、さらに、通常の授業においても、1年生から4年生までが異コース異学年のチームを形成し、協働探究を重ね、そこで取り組んだことの意味を多様なメンバーで繰り返し問い直すといったことを行っています。そして、すべての学生が、大学で学んだ成果をまとめ、自身の成長の足跡を残していく「学習個人誌」を作成・公刊しています。この学習個人誌は後輩たちが読み、協働探究の成果や経験が後の世代に受け継がれていきます。

新しい評価へ

福井大学教育学部の教員養成カリキュラムにおいて育まれる能力は、従来の標準化されたペーパーテストに見られるような、個別的な知識や技能の有無をチェックするという方法では評価することができません。

私たちは人間の能力を、複数の知識や技能や態度が組み合わされて状況に応じて発揮されるもの、新しい状況の中で何度も使い直されることによって全体的に習熟されていくもの、そして個人に宿るだけでなく集団の人間関係の中で発揮されるものと捉えています。そして、このような能力は、一人では解決できないような難しい課題を協働で探究するような学習の中で育まれるものであると考えています。

したがって、教師に必要な能力の評価は、第一に、探究を支援する機能を持っている必要があります。一人では解決できないような課題に向かっていく協働的な探究は、試行錯誤し、時には失敗しながら進んでいくものです。しかし、試行錯誤だけでは探究は進んでいきません。大切なことは、要所で自身の学習の過程を振り返り、学び直し、まとめ直し、そしてその意味を問い直すことを通して、次の新たな探究をデザインすることです。評価は探究や学習を促進するための道具であるのはもちろん、評価自体も探究や学習の重要な柱なのです。

このような評価は、第二に、能力が育まれた状況を豊かに表現するものである必要があります。どのような目標を目指した学習なのか。また、どのような状況において、どのような課題に向かい、どのように解決したのか。さらに、どのような環境や集団の中で学習を進めてきたのか。これらの情報が豊かに残された記録は、厳密な体制のもとで行われたテストよりもはるかに能力の育ちを読み手に伝えてくれます。また、能力が育まれた状況そのものを吟味することにもなります。つまり評価は、目標と学習そのものを問い直す道具でもあるのです。私たちは、先に述べた学習個人誌が、まさにこれら評価の二つの機能を担うものであると考えています。

以上のような考えに基づいて、私たちは教員養成を担う学部として共通スタンダードとコース別スタンダードという二種類の教員養成スタンダードを策定しました。いずれのスタンダードも、これからの時代の教師に求められる能力を目標として掲げ、その目標に向かって行われるべき学習経験を保障し、その証拠となる学習成果物を組織するという理念に貫かれています。

福井大学 教育学部 教員養成カリキュラムの概要

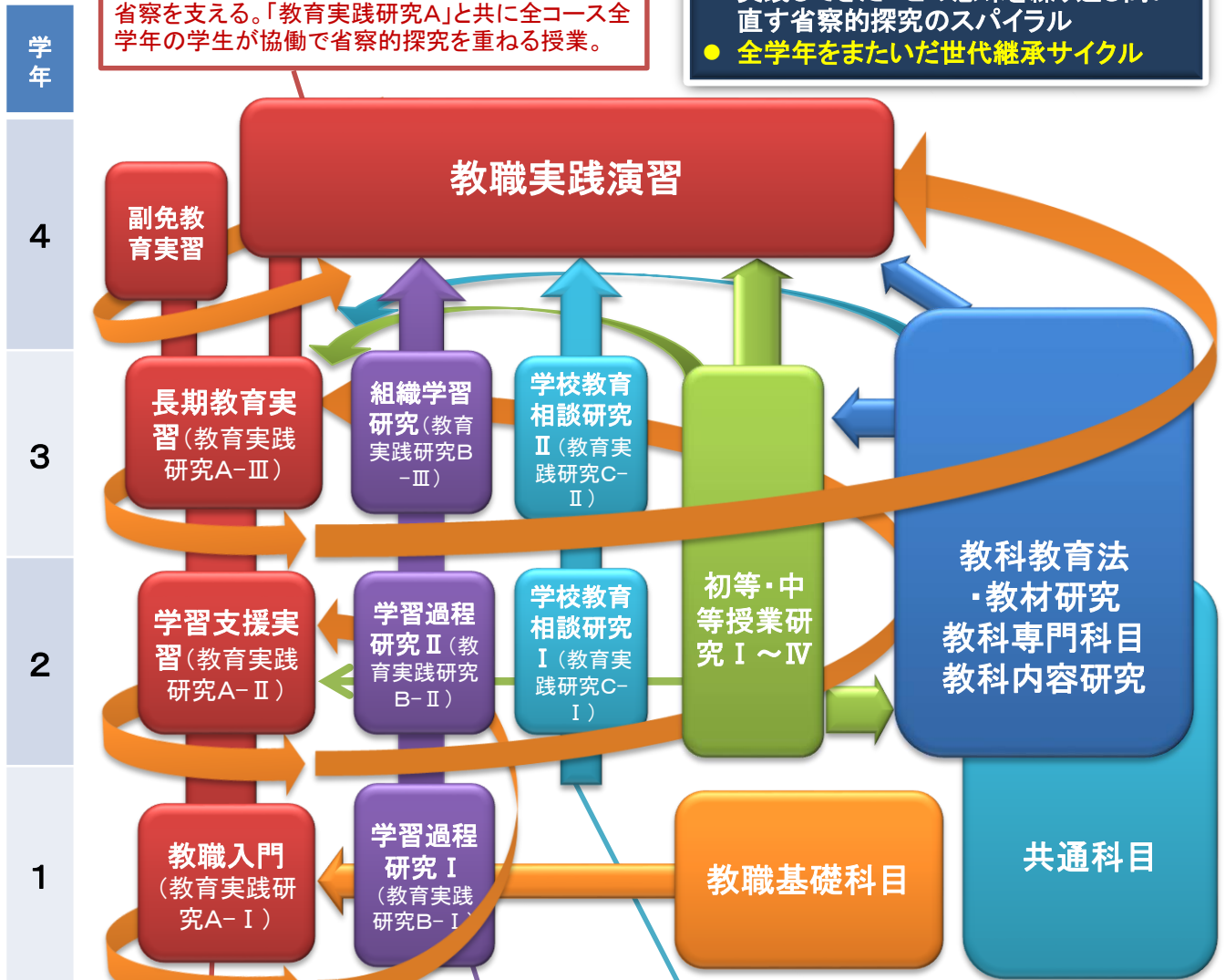
全学年が協働して地域の実践コミュニティに参画しながら省察的に学ぶ

- 生涯学習まで見据えた長期的な展望のもと、教科横断的な幅広い視野から、生徒指導や学級経営との関連で、アクティブ・ラーニングや協働探究プロジェクトを展開できる力を養成。
- 複雑化・多様化している課題に学校組織全体がチームとして対応できるようになるために、多様な専門性や経験を有するメンバーと協働。

教職実践演習

4年次の1年間をかけて履修。4年間の教職課程を振り返り、その意味を問い直す科目。1～3年生も「教育実践研究A」の授業として一緒に4年生の省察を支える。「教育実践研究A」と共に全コース全学年の学生が協働で省察的探究を重ねる授業。

- 教育実習前の多様な実践・臨床経験
- 1年次から実践を想定した教科専門・教職科目の学習を実現
- 実践してきたことの意味を繰り返し問い直す省察的探究のスパイラル
- 全学年をまたいだ世代継承サイクル



教育実践に関する総合的な実習・研究

教育実践研究A

「教職実践演習」と共に、1年生から4年生までの学生が異コース異学年でチームを組み、教育実践や教職に関する協働探究を重ねる。教育実習の他に、附属学校での参観、介護等体験、学校等での学習支援活動等を含む。

総合学習・特別活動・組織学習に関する実践研究

教育実践研究B 探求ネットワーク

隔週土曜日に地域の児童生徒300名が大学に集合し、長期にわたる総合学習・特別活動を展開。それを150名の学生が異世代の組織で支援。それを大学の授業内で構造化。

教育相談・生徒指導・進路指導に関する実践研究

教育実践研究C ライフパートナー

県内の不登校・発達障害児200名を教育委員会と連携して大学生が支援する。個別支援の実習。大学の授業内で講義とケースカンファレンスを実施。